

+1 (プラスワン)

「マイ荒れ野の四十日」

牧師 横山順一

松宮節さんに似た、俳優の火野正平さんが自転車に乗って日本各地を旅する「につぼん縦断・こころ旅」というテレビ番組(BSNHK)がある。

目的地は視聴者から送られて来る「思い出の手紙」によって決められる。

川上盾牧師が、沖縄での息子との思い出を綴った手紙が先月採用された。

過日、再放送のテロップを見ると「岡山県津山」とあったので、思わず久方ぶりの故郷・鶴山公園(かくざんこうえん)を画面を見た。

その翌日の行き先は「加茂」だった。広域合併で津山市となったが、昔は「苦田郡加茂町(とまたぐん・かもちょう)」だった。

単線のJR因美(いんび)線を一両のディーゼル車が走っているのどかな駅周辺には、店も何もない。

自分の記憶の中の賑やかだった

「加茂」とはすっかり光景が変わってしまっていた。

にも関わらず、加茂で過ごした三十年前の一カ月強が、それこそ走馬燈のように蘇ったのだった。

山間の小さな町に、津山にある県立高校の加茂分校があった。母がその教師をしていた関係で、知り合いの鉄工所をアルバイト先として紹介されたのだった。二十歳の春、内心断りたかった。

従業員は社長以下三名、「鉄工所」を名乗るが、実際は頼まれたら何でも引き受ける便利屋だった。だから、まだ裏寒い季節、川にかなり高い足組を立てて、橋の裏側からさび止めを塗る仕事もあったし、どこかの建設業者の下請けで、古い建物を取り壊す仕事も来た。コンクリートを砕くドリルの振動は夜になっても体に響いたことだった。

それでも基本は鉄工。驚いたことに初日からいきなり鉄筋の切断や接続をさせられた。

言うまでもない初体験である。もちろん最初にどうやるべきかのレクチャーはあった。

目を保護するマスクや分厚いグ

ローブをつけ、火花が飛び散る中、無我夢中で作業した。

仕事帰り、社長行きつけのスナックに連れられ、慣れないスコッチの水割りにむせた。

いよいよバイト期限が迫る頃、社長から「切れ」と言われて出されたのが、町の火の見櫓(やぐら)の鉄骨だった。たかが短期のバイトにあり得ない命令だ。

必死にやったが、案の定、櫓を建てて見たら一部足が長く傾いた。建てたまま切り直して都合をつけることになった。

驚きの連続。何が驚きと言って、何も経験のない者に、大切な仕事を「任せる」社長の存在だった。

それが彼の度量だったのかどうか未だに分からない。期待に応えられたはずはない。櫓など、明らかな失敗だった。

だが、一度として怒鳴られなかった。毎日、「明日」が楽しみだった。

経験したのは鉄工ではない。こんな人があるという豊かさ。恐れず任せるといふ深さ。すべて心を耕す訓練というほかない。今、それをイエスから教えられる。